

# 笠抜遺跡 2

—第3次調査報告—

# 大橋E遺跡 7

—第11次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1071集

2010

福岡市教育委員会



笠抜遺跡第3次調査

遺跡調査番号	0803	遺跡番号	2811	分布地図番号	井尻25
調査地地番	福岡市南区横手南18				
開発面積	760 m <sup>2</sup>	調査面積	504 m <sup>2</sup>	調査原因	市道新設
調査期間	20080410～20080909	担当者	屋山洋		

大橋E遺跡第11次調査

遺跡調査番号	0752	遺跡番号	2382	分布地図番号	三宅39
調査地地番	福岡市南区大橋4丁目地内				
開発面積	1,000 m <sup>2</sup>	調査面積	380 m <sup>2</sup>	調査原因	市道拡幅
調査期間	20071120～20080121	担当者	小林義彦		

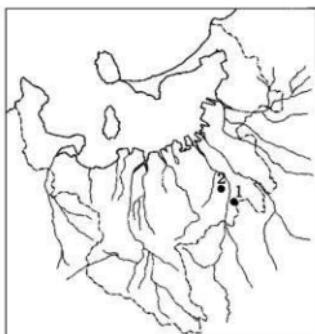
## 笠抜遺跡 2

—第3次調査報告—

## 大橋E遺跡 7

—第11次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1071集



1. 笠抜遺跡第3次調査  
遺跡略号 KSN-3  
調査番号 0803

2. 大橋E遺跡第11次調査  
遺跡略号 OHE-11  
調査番号 0752

2010

福岡市教育委員会

## 序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも南区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する笠抜遺跡と大橋E遺跡の発掘調査報告書は都市計画道路長浜太宰府線の新設に伴う調査成果についての記録です。この調査では笠抜遺跡第3次調査では古代末の井堰を確認し、大橋E遺跡第11次調査では中世から近世の集落跡を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2010年3月23日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

## 例　　言

- 本報告書は市道長浜太宰府線の新設に伴って発掘調査を行った南区横手南18に位置する笠抜遺跡第3次調査と南区大橋4丁目地内に位置する大橋E遺跡第11次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は笠抜遺跡第3次調査を福岡市教育委員会の屋山洋が、また大橋E遺跡第11次調査を小林義彦が担当した。
- 笠抜遺跡第3次調査の発掘調査期間は2008年4月10日から9月9日まで、大橋E遺跡第11次調査の発掘調査期間は2007年11月20日から2008年1月21日までである。
- 遺構と遺物実測は濱石正子、小林、屋山が遺構・遺物の写真撮影は小林、屋山が、製図は熊谷幸重、小林、屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は太宰府条坊跡X Y - 陶磁器分類編-(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

## 本文目次

I	市道長浜太宰府線関係の発掘調査について	1
II	笠抜遺跡第3次調査の報告	3
1.	はじめに	3
2.	調査の記録	6
1	調査の経過	6
2	遺構と遺物	6
1)	台地上の遺構と遺物	6
2)	河川出土の遺構と遺物	8
3)	杭	48
4)	出土木器	58
5)	出土木杭	58
3.	小結	58
4.	笠抜遺跡出土木材の樹種同定調査 (パリノサーヴェイ株式会社)	59
5.	図版	71
III	大橋E遺跡第11次調査の報告	77
1.	立地と歴史的環境	77
2.	調査の記録	79
1.	調査の概要	79
2.	基本層序	79
3.	土 壤	80
4.	溝遺構	82
3.	小 結	82

## 挿図目次

I	市道長浜太宰府線の調査について	
Fig.1	調査遺跡分布図 1 (1/50,000)	2
II	笠抜遺跡第3次調査	
Fig.2	調査地点位置図 2 (1/12,500)	4
Fig.3	調査地点位置図 (1/1,000)	5
Fig.4	調査範囲図 (1/300)	5
Fig.5	調査全体図 (1/100)	
Fig.6	遺構配置図 (1/500)	折り込み 折り込み
Fig.7	溝遺構・遺物実測図	7
Fig.8	河川土層図 (1/60)	7
Fig.9	I 区出土遺物1 (1/3)	11
Fig.10	I 区出土遺物2 (1/3)	12
Fig.11	I 区出土遺物3 (1/3)	13
Fig.12	I 区出土遺物4 (1/3)	14
Fig.13	I 区出土遺物5 (1/3)	15
Fig.14	I 区出土遺物6 (1/3)	16
Fig.15	I 区出土遺物7 (1/3)	18
Fig.16	I 区出土遺物8 (1/3)	19
Fig.17	I 区出土遺物9 (1/3)	20
Fig.18	I 区出土遺物10 (1/3)	21
Fig.19	I 区出土遺物11 (1/3)	22
Fig.20	I 区出土遺物12 (1/3)	23
Fig.21	II 区出土遺物1 (1/3)	26
Fig.22	II 区出土遺物2 (1/3)	27
Fig.23	II 区出土遺物3 (1/3)	28
Fig.24	II 区出土遺物4 (1/3)	29
Fig.25	II 区出土遺物5 (1/3)	30

Fig.26	II区出土遺物6(1/3)	31
Fig.27	III区出土遺物(1/3)	33
Fig.28	IV区出土遺物1(1/3)	36
Fig.29	IV区出土遺物2(1/3)	37
Fig.30	IV区出土遺物3(1/3)	38
Fig.31	IV区出土遺物4(1/3)	39
Fig.32	IV区出土遺物5(1/3)	40
Fig.33	IV区出土遺物6(1/3)	41
Fig.34	IV区出土遺物7(1/3)	42
Fig.35	I区杭列出土遺物(1/3)	43
Fig.36	I・II区杭列出土状況(1/30)	44
Fig.37	IV区杭列出土状況(1/40)	46
Fig.38	IV区河川出土遺物(1/3)	47
Fig.39	河川中層出土木器実測図(1/3)	48
Fig.40	出土杭実測図1(1/3)	49
Fig.41	出土杭実測図2(1/3)	50
Fig.42	出土杭実測図3(1/3)	51
Fig.43	出土杭実測図4(1/3)	52
Fig.44	出土杭実測図5(1/3)	53
Fig.45	出土杭実測図6(1/3)	54
Fig.46	出土杭実測図7(1/3)	55
Fig.47	出土杭実測図8(1/3)	56
Fig.48	出土杭実測図9(1/3)	57

### III 大橋E遺跡第11次調査

Fig.49	大橋E遺跡位置図(1/5,000)	77
Fig.50	大橋E遺跡第11次調査区位置図(1/1,000)	78
Fig.51	大橋E遺跡第11次調査区周辺現況図(1/500)	79
Fig.52	遺構配置図(1/150)	80
Fig.53	土層柱状模式図(1/400)	81
Fig.54	2～4号土壤実測図(1/30)	81
Fig.55	5号土壤実測図(1/40)	82
Fig.56	1号溝断面図(1/40)	82

## 図版目次

### 笠抜遺跡第3次調査

図版1	1. I区河川底面全景(南東から)	2. II区河川土層(東から)
図版2	2. II区河川底面全景(南から)	3. III区全景(北から)
図版3	4. IV区全景(東から)	4. IV区南壁土層(北東から)
図版4	5. I区上層検出面動物足跡痕	5. I区底面ササ状纖維質出土状況
	6. I区杭列A(南西から)	6. II区河川底面瓦出土状況
	7. I区底面遺物出土状況	7. II区杭列F(南から)
図版5	8. III区SD1002土層(北から)	8. III区SD1001(東から)
	9. III区杭列H(北東から)	9. IV区トレンチ土層(東から)
図版6	10. IV区杭504～512(北から)	10. IV区出土スサ状纖維質(I-34)
	11. IV区杭533周辺(東から)	11. IV区杭538周辺(東から)
	12. IV区ヤナ状木組み(北西から)	12. IV区ヤナ状木組み(北から)

### 大橋E遺跡第11次調査

図版7	調査区全景(北から)	
図版8	1.調査区北側全景(北から)	2.調査区中央部全景(北から)
図版9	2.2～4号土壤(北から)	3.調査区南側全景(南から)
図版10	3.1号溝(南から)	3.2トレンチ全景(北から)
	3.5号土壤(北東から)	3.6. IV区ヤナ状木組み(北から)

## I 都市計画道路長浜太宰府線の発掘調査について

### 1. 調査に至る経過

都市計画道路長浜太宰府線は西鉄大橋駅の西側で県道31号線から南東側へ分岐し、31号線の南側を並行して走る新設の道路で、国道385号線を超えて那珂川を渡り、南区横手南で福岡外環状道路に接続する総延長2300mの道路である。これまで関連する発掘調査として平成13年10月の大橋E遺跡第8次調査と平成14年4月の大橋E遺跡第9次調査が行われており、この2回の調査に関しては2004年発行の『大橋E遺跡 6』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第791集)にて報告されている。

今回報告する大橋E遺跡第11次調査と笠抜遺跡第3次調査に関しては平成15年2月12日と7月3日に土木局道路建設部南部建設課課長から埋蔵文化財の有無を確認するための調査依頼が教育委員会埋蔵文化財課に提出された(土木第2611号、同918号)。申請地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である大橋E遺跡、三宅C遺跡、横手遺跡、笠抜遺跡が含まれており、また、これまであまり調査が行われず遺跡の分布状態が不明な地区も含んでいたため、埋蔵文化財課(平成18年4月からは埋蔵文化財第1課)では予定地の取得にあわせて平成15年から19年にかけて順次試掘調査を行い、遺跡の有無の確認を行った。

### 2. 試掘調査

遺跡の有無を判断するための試掘調査はまず平成15年3月3日に国道385号線と那珂川の間の試掘を行った。この地区には三宅C遺跡が含まれるが、遺跡(包蔵地)の周辺では深さ2m以上掘り下げたところ、全体が粗砂層で形成されており遺物等は出土していない。遺跡内では現地表から100~130cmの深さで遺構とされる褐色粘質土に達したが、粘質土上面で遺構は確認されず、その下に堆積している砂質土においても遺構、遺物とも確認できなかった。

平成15年7月29日と30日には那珂川東側の横手遺跡を含む横手3丁目地内の試掘調査を行った。試掘トレーナーは横手遺跡内を含んで9本設定した。遺跡内には現地表から100cm前後の深さで遺構面の可能性がある黄褐色のシルト層が広がるが、その上面では遺構を確認できなかった。黄褐色シルトの下層では砂層とシルトが薄く堆積する部分と、青白色~白色粘土が堆積する部分があるが、どちらでも遺構は確認されていない。遺跡の包蔵地外では安定した黄褐色シルト層は確認できず、基本的には薄いシルト層と砂層が互層になって不安定な堆積状況を示しており、現地表から200cm程の深さで水成堆積の灰色粗砂に変わる。各トレーナーで層の堆積や厚さが異なっており、那珂川やその他の小河川による複雑な堆積を示していると考えられる。

平成19年9月20日には外環状道路の北側に位置する笠抜遺跡とその外側の包蔵地外の試掘調査を行った。笠抜遺跡内では耕作土直下に広がる黄褐色シルト層上層で柱穴群を確認した。包蔵地外の北側では青灰色粘質土が堆積しており、遺構や遺物は確認されていない。実際調査時に並行して行われていた掘削工事を見ていたところ暗青灰色土の厚く堆積で、長期間湿地であったと思われる。

同じ9月20日には大橋4丁目地内(大橋E遺跡包蔵地内)の確認調査も行い、現地表から100cm程下のローム上面で柱穴を確認した。

以上の試掘調査により埋蔵文化財第1課では大橋E遺跡と笠抜遺跡の発掘調査が必要であると判断し、土木局道路建設部南部建設課と協議を行った結果、平成19年(2007年)11月20日から平成20年1月21日まで大橋E遺跡の第11次調査を、平成20年(2008年)4月10日から9月9日まで笠抜遺跡の第3次調査を行った。

- 1 等抜遺跡  
 2 大橋E遺跡  
 3 福岡城跡  
 4 博多遺跡群  
 5 堅粕遺跡  
 6 箱崎遺跡  
 7 古塚遺跡  
 8 横田遺跡  
 9 上牟田遺跡  
 10 飯居遺跡  
 11 山王遺跡  
 12 比鹿遺跡  
 13 黒河遺跡  
 14 東那珂遺跡  
 15 熊谷休遺跡  
 16 板付遺跡  
 17 諸岡A遺跡  
 18 五十川遺跡  
 19 井尻A遺跡  
 20 井尻B遺跡  
 21 諸岡B遺跡  
 22 笹原遺跡  
 23 三筑遺跡  
 24 井尻C遺跡  
 25 横手遺跡  
 26 寺島遺跡  
 27 曰佐遺跡  
 28 上曰佐遺跡  
 29 三宅C遺跡  
 30 二宅B遺跡  
 31 野多日A遺跡  
 32 野多日B遺跡  
 33 野多日C遺跡  
 34 野間B遺跡  
 35 中村町遺跡  
 36 守塚A古墳群  
 37 長尾遺跡  
 38 犀井川B遺跡  
 39 宝台遺跡  
 40 梶栗遺跡



Fig.1 調査遺跡分布図1 (1/50,000)

## II 笠抜遺跡第3次調査の報告

### 1.はじめに

#### 1 遺跡の立地と環境

笠抜遺跡は那珂川右岸に沿って延びる丘陵とその周辺に位置しており、周辺の台地上には多くの遺跡が分布する。笠抜遺跡が位置する台地の東側には寺島遺跡が隣接しており、西側には曰佐遺跡、北側には横手遺跡が分布している。また笠抜遺跡の南側は春日市に接しているが、春日市側にも須玖遺跡群や御陵遺跡など弥生時代の著名な遺跡が分布するなど弥生時代の奴国を中心部として重要な地點であると共に、古代においても鴻臚館と太宰府を結ぶ官道の西門ルートの推定位置に近く、三宅遺跡や井尻B遺跡、春日市の須玖遺跡群など7世紀後半から8世紀頃の瓦が出土する遺跡も多く立地しており、古代においても重要な地域であったことが判明してきている。

笠抜遺跡はこれまで外環状道路の建設時に2次にわたる調査が行われているが、そのうち第1次調査は外環状道路にかかる部分の発掘調査で、第2次調査は第1次調査で検出された突堤文土器段階の給排水溝の延長部を把握するためのトレンチによる確認調査である。このうち本調査地点の南側に隣接する1次調査では台地東側を流れる河川から弥生時代中期後半の時期にあたる貯水施設の水位を調整するための平面形がアーチ状の井堰と考えられる木杭列4列が検出された。台地上では突堤文期の可能性がある水路や弥生時代から律令期の溝を数条確認した他、土坑や柱穴群が確認されている。1次調査の遺物は、河川から中期後半の土器が多量に出土した他に、銅矛の中子や鋸型土製品なども出土している。これらの出土遺物は笠抜遺跡南側の河川上流に位置し、弥生時代後半の集落から銅矛と銅鐵の鋳型が出土した御陵遺跡(春日市)との関連がうかがえる。

### 2 調査の組織

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

埋蔵文化財第1課課長 (前)山口謙治 (現)濱石哲也

調査係長 米倉秀紀

調査庶務 (前)古賀とも子 (現)山本朋子

調査担当 堀山 洋

作業員 石田和子 岡部安正 片岡武俊 川原明子 桑原美津子 鈴木 誠 遠山 獅 豊田忠一

中村健三 夏秋弘子 西 美由紀 平田周二 前田佳代 水野由美子 御手洗史子

山田ヤス子 吉田哲夫

整理作業 大石加代子 熊谷幸重 藤野洋子

3 調査の概要 I～IV区を流れる河川で古代から中世にかけての木杭列を数列確認した。灌漑用の溝に取水するための井堰として使用されたものと思われる。流れがやや緩やかなところでは井堰の木組みがわずかに残っているところもあったが、ほとんどは河川の流れで崩壊しており、川底に打ち込まれた部分のみが遺存している杭も多い。遺物は河川下層の粗砂層から多量に出土している。時期は弥生時代後期から古墳時代前期と古代が主で一部弥生時代中期や12世紀代の貿易陶磁等が混じる。

弥生時代、古代とも笠抜遺跡では大規模な集落は検出されておらず、遺物の出土量も少ないため、これらの遺物が笠抜遺跡から廃棄されたとは考えがたい。また、遺物の多くは表面が強く摩滅していることからは南側の弥永原遺跡や流路を挟んだ寺島遺跡などから流れてきたものと考えられる。



Fig.2 調査地点位置図2 (1/12,500)

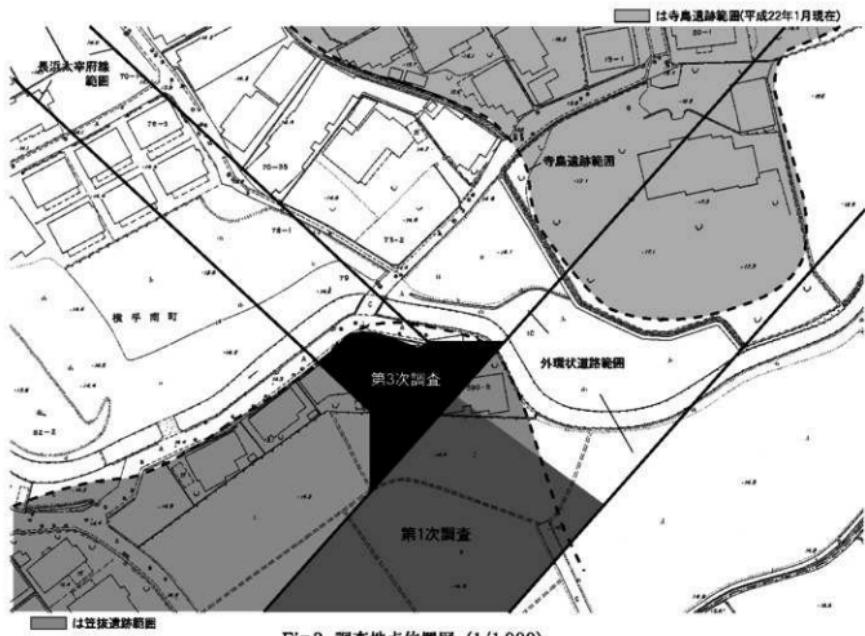


Fig.3 調査地点位置図 (1/1,000)

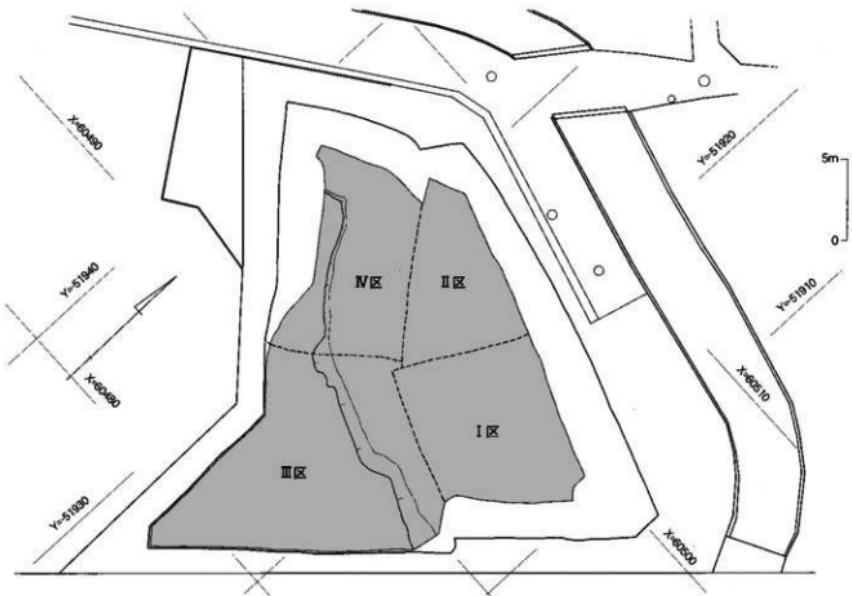


Fig.4 調査範囲図 (1/300)

## 2. 調査の記録

### 1 調査の経過

調査区の3/4は旧河川であるが、河川が完全に埋没したと考えられる近世以降は水田として利用され、近年は1m近い盛り土をして宅地となっていた。そのため中世末と考えられる遺構面までの深さは2.1m、河川底面までの深さが3.4mと深いため調査時に廃土が多量に出ると予想された。しかし南側が段差がある道路、西側が畑、東側と北側が用水路に囲まれているためトラックが現場に入って来れないことから、場外に土を運び出すことができずに總て場内処理をすることになり、調査区を4分割して1/4ずつ調査し、残りを廃土置き場とすることとした。調査の工程は4月10日に発掘機材の搬入を行い、11日から重機で表土剥ぎと調査区を柵で囲む作業などを行ってからⅠ区の調査を開始した。表土はGL-2mの河川粗砂層上面まで重機で掘り下げ、その後は上・中・下層に分けて手掘りで掘り下げた。調査期間はⅠ区が4月15日から5月16日まで、Ⅱ区が5月21日から6月11日まで、Ⅲ区が6月16日から8月4日まで、Ⅳ区が8月7日から9月5日までである。8月上旬から月中旬にかけては豪雨が断続的に続いて東側用水路があふれ、現場が数回水没すると共に流れ込んだ水で調査区壁面が削れ、廃土が崩壊しかかるなどの被害が出た。9月5日には埋め戻しと外柵の撤去を行い、8日と9日に機材の片付けと撤去を行い調査を終了した。掘り下げ、埋め戻しなど重機を使用するときには国土交通省福岡国道事務所の協力を得て、南側の外環状道路側から出入りを行った。

2 遺構と遺物 台地上では弥生時代前期と中世の溝、それに各時期の柱穴群を検出した。溝は第1次調査C区で出土したSD-10とSD-02の続きを確認した。突帯文期とされるSD-10は第2次調査で確認されていたとおり北に直進する。SD-02は調査区の南端で確認した。どちらも遺物の出土量は少ない。柱穴状遺構は台地上全面で検出したが、浅い掘り込みが多く遺物の出土量は少ない。時期は弥生時代中期頃から中世まであり、断続的に集落が営まれていたと考えられる。東側河川は1次調査で弥生時代中期後半の杭列を4列出土している。第3次調査では8~10世紀頃の杭列を数条検出したが、いずれもその後の流れによって押し流されており、杭列が崩壊していたり、土中に打ち込まれた部分のみ出土するなど遺存状態が悪く、井堰の長さや幅など本来の状態は不明である。

#### 1) 台地上の遺構と遺物

台地は調査区南西側のⅢ区内に位置する(Fig.5)。土壤は黄白色から青灰色を呈す細かなシルト質でロームの再堆積である。図版5-5の土層写真によると、黄白色シルトは暗青灰色土の上に乗っているが、暗青灰色土は厚さ1m前後で、その下層はガチガチに締まった礫層である。暗青灰色土層から遺物番号548の自然木片(ヒツツバタゴ)が出土した。パリノサーサウェイの同定でも触れているが、現在愛知県、岐阜県、長野県の一部に分布する落葉広葉樹で最終氷河期等の古い化石木材の可能性がある。将来C14等を行う機会があれば、台地形成時期を知る資料となる。台地上は北側に傾斜しており、調査区近辺では標高14.5mを測る。台地上面で2条の溝と柱穴群を検出した。

#### 溝

SD1001(Fig.6) 調査区の西端部に位置する。第1次調査のSD-02にあたる。主軸をN-74°-Wにとる東西方向の溝で幅140~190cm、深さ107cmを測る。断面は逆台形を呈す。黄褐色シルトの上に堆積した黒褐色土の上から掘り込む。覆土は薄いレンズ状の堆積で灰褐色~茶褐色を主とし、一部に細砂層を含む。遺物は弥生土器と思われる破片がほとんどで、その他には黒曜石片1点、ヘラ切りの土師片らしき破片が1点、龍泉窯系と思われる青磁片1点が出土したが細部で図化できない。

SD1002(Fig.6) 台地上の中央で検出した南北方向の溝である。南側は緩やかなカーブを描き、北東側では直線的である。主軸は台地北端でN-43°-Eをとり、幅40~70cm、深さ63cmを測る。断面

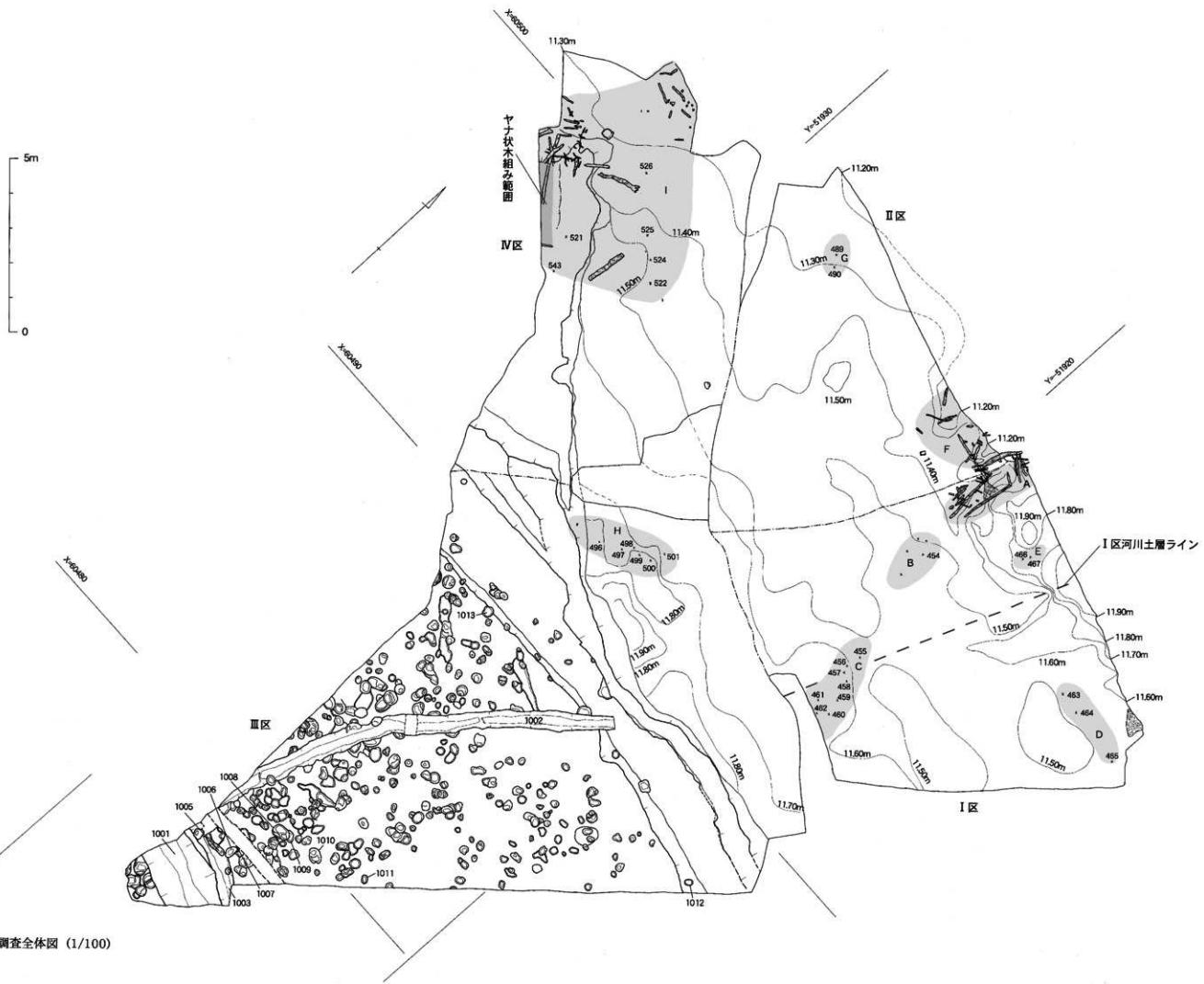


Fig.5 調査全体図 (1/100)



Fig.6 第1次・第3次調査構造配置図 (1/500)

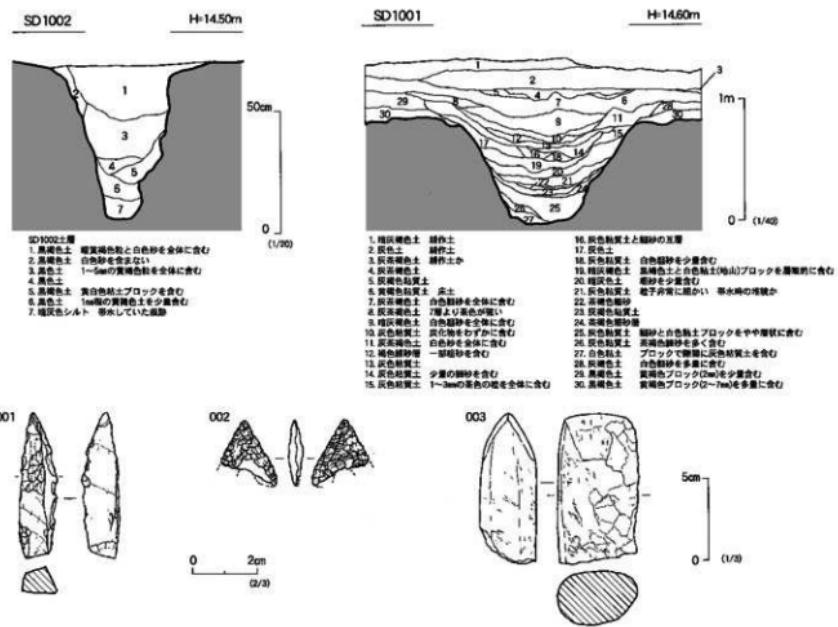


Fig.7 溝造構・遺物実測図 (1/20、1/40、2/3、1/3)

図から掘り直しが行われたと思われる。最初断面Y字型に近い溝が埋没した後、今度は断面がV字型の溝(土層の1~5層で検出面からの深さ50cm弱)を掘り直している。覆土は1~5層が黒~黒褐色土を呈し、6・7層は黒~暗灰色を呈す。出土遺物(Fig.7-001)は黒曜石片製の尖頭器で重さ4.23gを測る。表面は風化しているが、調査時につけた剥離面がある。1次調査で出土したSD-10と同一の溝であるが1次調査で尖端文土器が出土しており、時期は弥生時代前期初頭と考えられる。

柱穴状遺構

台地上全体で柱穴状構造を検出した。南側がやや密であるが、全体的に深さが浅いのは台地上面が削平を受けたためと思われる。調査区内では掘立柱建物や柵列等を確認することはできなかった。遺物は台地上全体でパンケース 1/3箱と少量しか出土していない。

I 区河川土層図

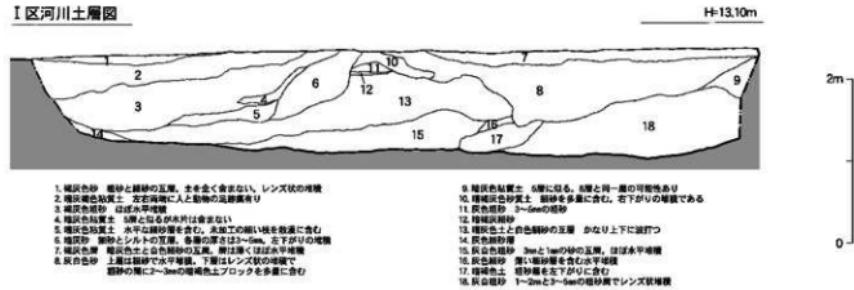


Fig.8 河川土層図 (1/60)

### その他の出土遺物(Fig.7 002-003)

台地上平坦面の黄白色シルト上には厚さ8~25cm程の黒色土が被っており、その中から石器が2点出土した。002は黒曜石製の石鎌である。根本側が欠損する。003は玄武岩製磨製石斧である。

### 2) 河川出土の遺構と遺物

各調査区で河川から杭列と多量の遺物が出土した。まずI区でトレーナーを設定し、河川の埋没状況を確認した(Fig.7)。それによると一度調査区内の河川全体を占めるような大きな流路が粗砂で埋まつた後も小さな流路が場所を変えながら流れていた事が判る。図の土層番号では、1~8層が小さな流路で13~18層が、全体的な大きな流路である。また大きな流路は北側が早い時期に埋まり、台地際に小河川が最後まで残ったと思われる。河川の掘り下げ時には、I~IV区を通して小さな流路を上層、大きな流路の上半の堆積を中層、下半を下層として遺物を取り上げた。遺物は下層の粗砂から多く出土した。遺物の時期は各層とも弥生時代中期後半から古墳時代前期の土器が多く含む他、下層では6世紀末~8世紀頃と思われる土師器や須恵器と瓦が出土している。須恵器は数は多くなく、器種は壺と壺蓋がほとんどで若干、甕や高杯が混じる。瓦の多くは土師質で、須恵質のものも焼成が弱いものが多い。タタキは斜格子タタキが多く、網目タタキとナデが少量混じる。中層の出土遺物は少ない。上層では数点あるが12~14世紀の貿易陶磁器が出土していることから、大きな流路が埋没したのが8世紀前後で、その後、古代末から中世までは台地際に小さな流路が残っていたと思われる。II区上層からは風字硯の破片が出土している。上層の更に上に耕作土の可能性がある暗灰褐色土が堆積しており、埋没した後は水田化したものと思われるが、その上にも粗砂が被っており、河川の氾濫は続いた様である。暗灰褐色土上面で人と動物の足跡痕を確認した。動物は蹄で大きさはシカかイノシシ程度の大きさである。東側河川出土遺物の多くに強い摩滅が見られる。使用時につけた摩滅の可能性もあるが、笠抜遺跡内で明確な住居跡が確認されていないことから、上流から流れ込んだものと考えられる。遺物の報告に関しては各層ごとに古い時代順に報告する。弥生時代の遺物は埋没時期を現さないため各層ごとに分ける意味は少ないので、各層ごとの流入元の違いを反映している可能性もあることから一応分けて報告するものである。

### I区の出土遺物(Fig.9~20 004~201)

004~098は上層及びトレーナーや雨による壁面崩壊時に出土した遺物で、そのうち004~036は弥生時代~古墳時代前期の遺物である。004~006は壺で004は復元口径30cm前後を測る。淡黄褐色を呈し胎土中に1mm程の白色砂を多く含む。表面は強く摩滅している。005は復元口径27.2cmを測る。口縁はL字型を呈し、上面に径1.8cmの円形粘土板が張り付き、頸部には断面三角形の突帯が付く。調整は摩滅が激しく表面は不明。内面は指オサエを施す。淡黄褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む他に赤・黒褐色粒や雲母片を少量含む。006は復元口径14.4cmを測る。明赤褐色を呈し、白色砂を多く含む。007~008は壺の口縁小片か。009は瓢型土器である。外面に赤色顔料を塗布する。内面は表面が剥落しており淡黄褐色を呈す。010~014は甕口縁である。010は復元口径18.8cmを測る。表面は摩滅が著しいが内面は指オサエ後ナデを施す。外面は煤が付着していたと思われ暗灰褐色を呈し、内面は黄褐色を呈す。胎土中に5mm以下の白色砂を多く含む。011は復元口径25.2cmを測る。淡褐色を呈し外側の一部に煤の痕跡がある。胎土は白色・褐色砂を多く含む。強く摩滅している。012は復元口径23.7cmを測る。灰黄褐色を呈し外側は煤が付着する。調整は外側が縦ハケ、内側はヘラケズリを施す。013は外側に赤色顔料の痕跡が残り、内面は灰白色を呈す。白色砂を多く含む。摩滅著しい。014は灰白色を呈し白色と茶色の粒を少量含む。015~018は底部である。015は底径6.4cmを測る。外側は赤みをおびた黄褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。内面は淡褐色を呈す。摩滅著しい。

016は底径8.4cmを測る。外面はハケメ、内面は指オサエ後ナデを施す。淡黄褐色を呈し、胎土に1～2mmの白色砂を多く含む。017は復元底径8cmを測る。底面はややレンズ状に膨らむ。淡褐色を呈し、胎土には白色砂の他に赤色や黒褐色の粒を含む。表面が強く摩滅する。018は復元底径3.4cmを測る。外面は赤褐色～黒色、内面は淡黄褐色を呈す。表面は摩滅のため不明。胎土中に白色砂を多く含む。019・020は器台である。019は復元底径10cmを測る。外面は指オサエで端部は横ナデを施す。淡褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。020は頸部径は約8cmを測る。調整は摩滅のため不明瞭であるが、外面は継ハケ、内面は継ナデでシボリを消している。淡褐～明褐色を呈し、胎土中に2mm程の白色砂を多量に含む。021・022は甕棺口縁である。021は摩滅著しい。黄褐色を呈す。022は復元口径50cm程で、外面赤褐色を呈す。023は砂岩製石包丁の小片である。024は二重口縁壺の口縁部で端部は欠損する。黄褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む他に雲母片、黒色粒を含む。摩滅のため調整は不明である。025は復元口径7.6cmを測る。摩滅のため不明瞭であるが口縁は内外面とも横ナデと思われ、胴部内面は継方向のケズリである。色調は外面が鈍い橙色、内面が灰白色を呈し、胎土に白色砂、雲母片を含む。026は手づくね土器で復元口径3.1cm、器高2cm強を測る。外面は鈍い褐色、内面は灰黄色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。027は壺胴部である。復元最大胴径12.7cmを測る。調整は胴部内外面ともケズリのような強いヘラナデを施し、頸部から上は不明である。淡灰褐色を呈し、胎土に1mm程の白色砂を多く含む。028は甕口縁で復元口径21cmを測る。口縁部から頸部は内外面とも横ナデ、胴部内面には横方向のヘラケズリを施す。黄褐色を呈し、白色細砂を多く含む。029は甕の肩部で復元頸部径13cmを測る。表面は摩滅のため調整不明、内面はヘラケズリを施す。表面は淡灰褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。030は甕口縁部で復元口径14.8cmを測る。表面は斜め方向のハケメの上に横ナデを施す。内面は摩滅のため不明。白褐色を呈し、細砂を多く含む。031は高坏の坏部で復元口径15cmを測る。表面は摩滅のため調整不明、内面は全体的にミガキを施すが、底部と坏部の境に一部ミガキ残しがあり、ハケメが残る。灰色をおびた淡黄褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。032～034は土師碗で032は復元口径10.4cmを測る。調整は不明で明褐色を呈し、白色砂を多量に含む。033は復元口径11.8cmを測る。摩滅のため調整は不明である。少し灰色をおびた黄褐色を呈し、胎土に1～2mmの白色砂と赤色粒を多く含む。034は復元口径17.2cmを測る。内外面とも横方向のミガキを施す。色調は外面が赤褐色、内面は黒色を呈す。胎土中に細砂を少量含む。035・036は高坏脚部である。035は復元底径19cmを測る。調整は摩滅のため不明。明褐色～灰褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。036は復元底径11.8cmを測る。内外面全体に横ナデを施す。坏内面は淡灰色、その他は淡黄灰褐色を呈す。胎土中に白色砂と赤褐色粒を多く含む。037～045は古墳時代後期から古代の土器である。037は須恵器坏蓋で復元口径13cmを測る。遺存部分は全体に回転横ナデで、灰色を呈し白色細砂と黒色粒を少量含む。038・039は須恵器坏である。038は口径10.1cmを測る。調整は外底部が回転ヘラケズリ、その他は回転横ナデで内底部は指ナデを施す。暗灰青色を呈し、白色砂と黒色粒を含む。039は復元口径10cmを測る。内面と受け部は暗灰褐色を呈し、外面坏部は自然釉が掛かり黒色を呈す。胎土に白色砂と黒色粒を含む。040は須恵器坏蓋で復元口径は約15cmを測る。暗灰色を呈し、白色砂と黒色粒を少量含む。041・042は須恵器高台付坏である。041は復元高台径は約10cmを測る。全体に回転横ナデ痕が残る。灰色を呈し白色細砂と黒色粒を含む。042は復元高台径7.8cmを測る。全体に回転横ナデを施すが、その後内底部に指ナデを施す。青灰色を呈し、胎土に白色砂黒色粒を含む。043は須恵器高台付の壺である。胴部は回転ナデ、内底部はナデをを施す。灰色を呈し、胎土に白色細砂を少量と黒色粒を多く含む。044は須恵器高坏である。脚部は内外面とも横ナデでシボリ痕が残る。坏内底部は指ナデである。外面は暗灰色を呈し、胎土に白色砂を少量含む。

045は須恵器鉢か壺の底部である。復元底径6.8cmを測る。外底部はヘラケズリ、それ以外は回転横ナデを施す。暗青灰色を呈し、胎土に白色砂を少量含む。046～079は古代から中世前半の土器である。046は白磁碗IV類で復元口径15.9cmを測る。胎土は黄褐色～黄灰褐色で、釉は黄色をおびた灰白色を呈す。内面口縁下には釉が垂れ、外面下半は露胎である。047は白磁碗V類である。復元口径16.2cmを測る。胎土は白色で、釉はわずかに緑黄色をおびた灰白色を呈す。外面に縦線文の一部が残る。048は陶器壺底部で復元底径は約10cmを測る。胎土は赤褐色で白色と黒色の粒を含む。釉は暗赤褐色で疊付を含め全面に施す。疊付の一部に目跡が残る。049は白磁皿IX類で復元底径6cmを測る。胎土と釉は灰白色を呈す。外底部端全周と内底部端の一部に目跡痕の白色砂が付着している。050・051は越州窯系青磁碗底部である。050は復元底径6cmを測る。胎土は少し黄色をおびた淡灰色を呈し、釉は黄緑をおびた灰色で内外全面に施される。疊付の残存部に目跡が2カ所残る。051は復元底径7.6cmを測る。胎土は少し赤みをおびた灰色で、黒色と赤褐色の粒を含む。釉は薄黄褐色を呈し外側高台部は露胎である。内底面端から1cm上側と外底部端から1.5cm内側に目跡が残る。052～054は黒色土器A類碗で052は復元口径16.2cmを測る。外面は摩滅のため不明瞭であるが、一部に横方向のミガキが残る。内面も若干摩滅しているが全体に横方向のミガキを施す。外面は赤みをおびた黄褐色で、内面は黒色だったのが摩滅のため灰褐色を呈す。胎土は粘土粒が細かく砂を少量含む。053は復元高台径8.4cmを測る。内外面とも摩滅のため調整は不明瞭である。外面は摩滅のため暗灰色、内面は赤褐色～灰白色を呈し胎土に白色砂と雲母片を少量含む。054は復元高台径8.8cmを測る。調整は外面が回転横ナデで内面は横方向のミガキを施す。内面は黒色で、外面は少し赤みをおびた淡褐色を呈す。胎土に細砂を少量含む。055は土鍋で復元口径37.4cmを測る。調整は内面全体に横ハケを施す。外面は煤が付着しており不明瞭であるが、上半の一部は指オサワ、下半には縦ハケがみられる。色調が外面は黒色、内面はにぶい黄橙色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。056は板状土器製品である。残存高6.2cm、厚さ2cmを測る。調整は摩滅のため不明瞭であるが全体を丁寧にナデて面を整えている。色調は外面が黒～灰褐色で、内面は灰黃白色を呈す。胎土中に白色砂と赤褐色粒を多く含む。瓦の可能性もあるが、タキ等がみられないため別の製品であると思われる。057は土師質の把手である。器種は不明であるが、痕跡から器壁の厚さが2cm前後あるため、大型の容器であったと思われる。長さは約14cm、径4cmと大きく、片側のみにハケメを施す。色調は淡褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む他、赤褐色や黒褐色の粒も含む。焼成は良好である。058は瓦質の片口鉢である。色調は灰白色であるが、口縁端部のみ黒色を呈す。胎土中に白と黒色の細砂を含む。059～073は底部がヘラ切りの土師杯と皿である。059は復元口径12.6cm、器高3.5cmを測る。外底部はヘラ切り後板状圧痕を施し、その他は回転ナデであるが、内底部は指ナデを施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土中に細砂を少量含む。内面は下半に墨痕と思われる付着物があり、硯として使用された可能性がある。060は復元底径9cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施し、その他は回転ナデである。外面は淡褐色で底部に黒斑がある。内面は少し赤みをおびた褐色を呈す。胎土中に白色細砂と赤褐色粒を多く含む。061は底径8.6cmを測る。底部はヘラ切りで、その他は回転ナデである。外面は少し灰色をおびた淡黄褐色で、内面は灰黒色を呈す。胎土中に白色細砂と雲母片を多く含む。062は復元口径14cm、器高3.4cmを測る。外底部はヘラ切りで、杯部は回転ナデ、内底部は指ナデを施す。色調は少し灰色をおびた黄白色を呈し、胎土中に白色砂と赤色粒を少量含む。063は復元口径11.8cmを測る。外底部はヘラ切りで、かすかに板状圧痕が残る。杯部は回転ナデで、内底部には指ナデを施す。淡黄褐色を呈し、胎土は細かく砂粒を少量含む。焼成良好。064は復元口径10cm、器高2.7cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施す。杯部は回転ナデで、内底部には指ナデを施す。外面は灰白色、内面は灰褐色を呈し、白色砂と雲母

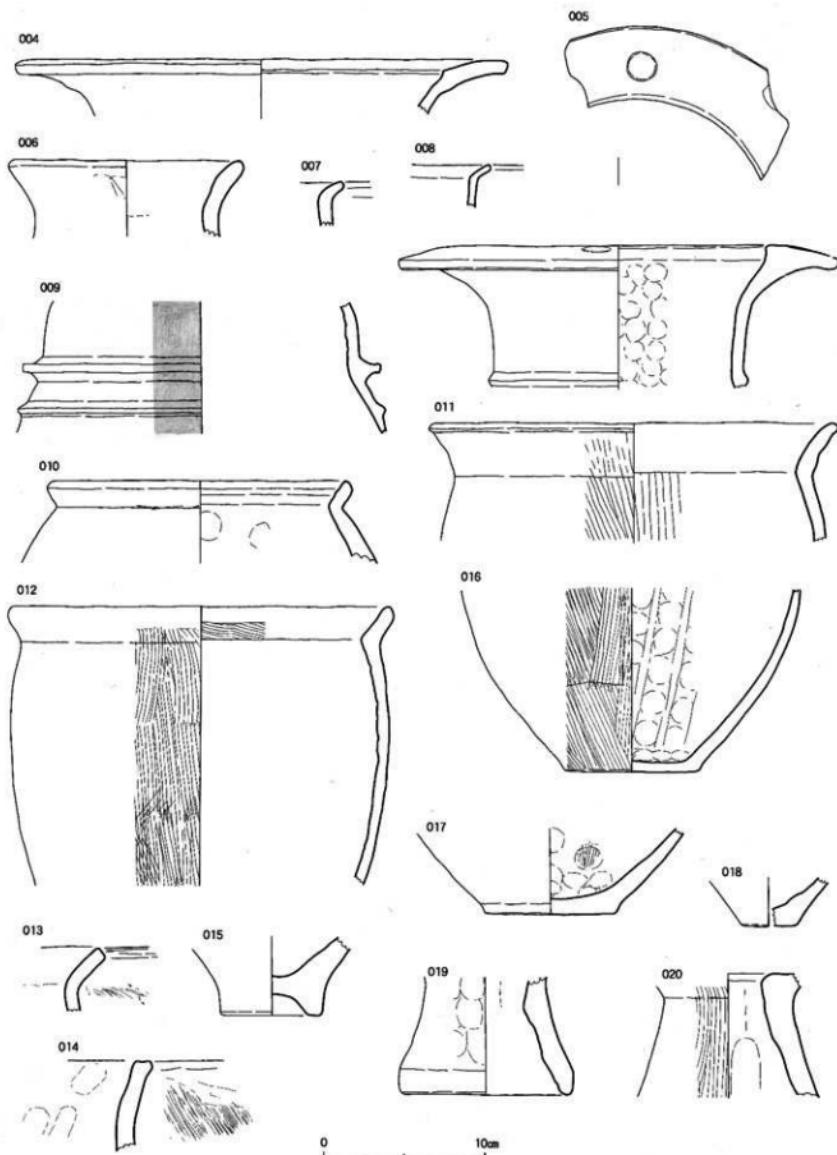


Fig.9 I区出土遺物1 (1/3)

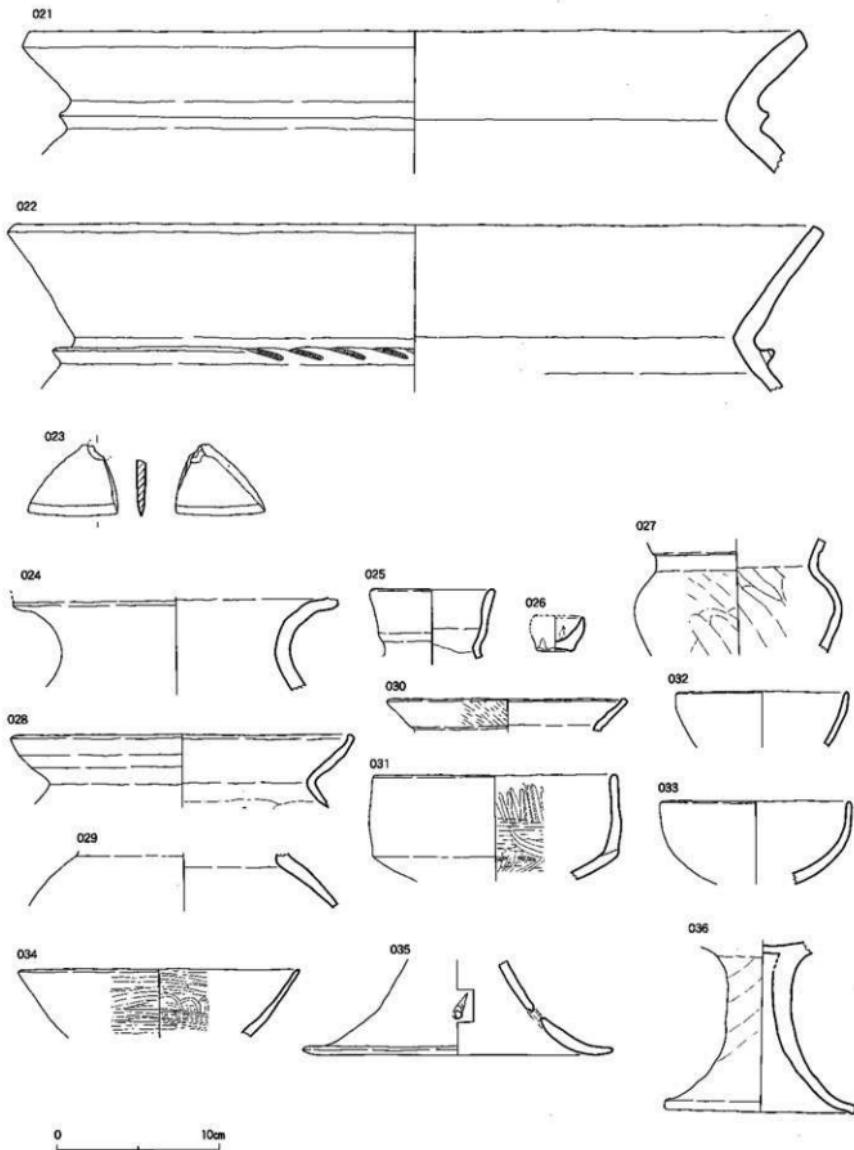


Fig.10 I区出土遗物2 (1/3)

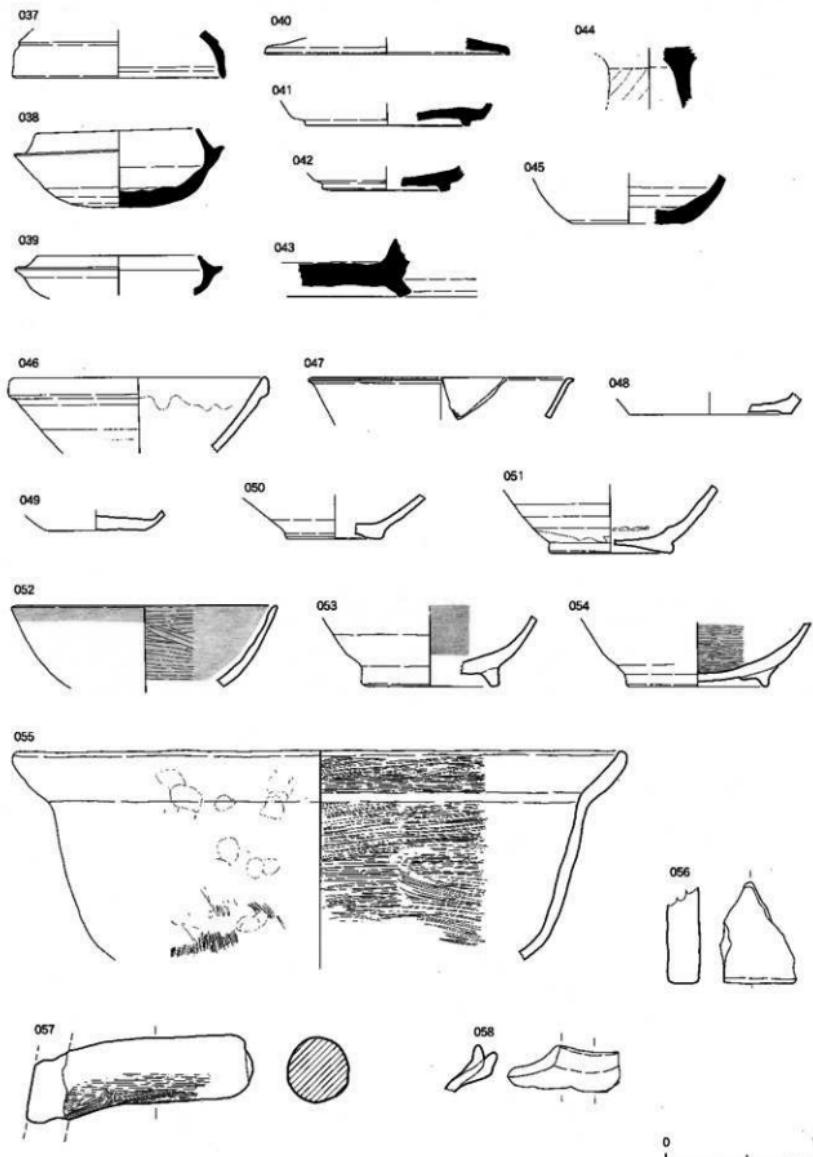


Fig.11 I区出土遺物3 (1/3)

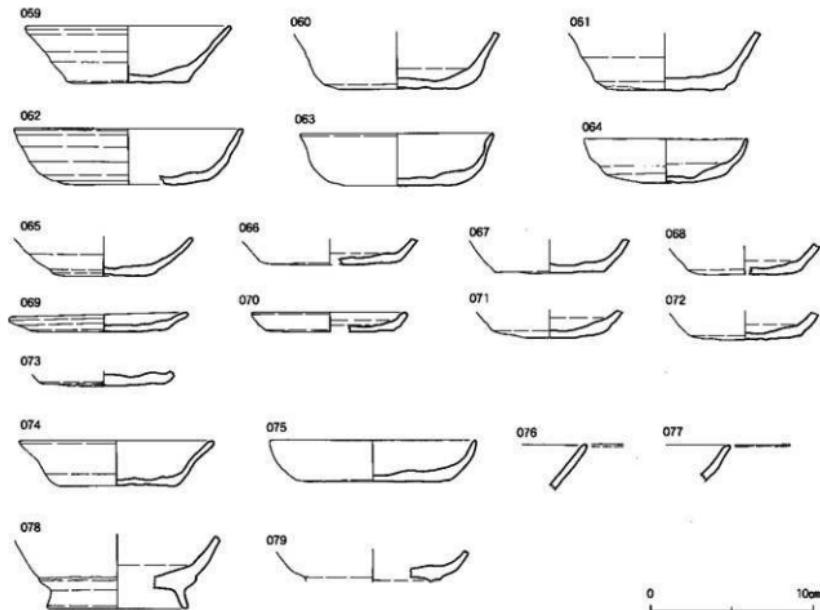


Fig.12 I区出土遺物4 (1/3)

片を少量含む。065は底径6.4cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施す。坏部は回転ナデ、内底部は指ナデを施す。色調は淡灰褐色で外底部に煤が付着した痕跡がある。胎土中に砂粒を少量含み、その他に長径1cm弱の小石が内底面に露出している。066は復元底径約8cmを測る。外底部はヘラ切りで、その他は回転ナデである。内外面とも黒色を呈し、胎土中に細砂を多く含む。067は底径6.8cmを測る。外底部はヘラ切りで、坏部には回転ナデを施す。全体に薄い黄褐色を呈すが、外底部はやや灰色をおびる。内面に炭化物が付着する。068は復元底径7cmを測る。淡黄褐色を呈し、外底部はやや灰色をおびる。胎土中に細砂を少量含む。069は口径11.6cm、器高1.2cmを測る。外底部はヘラ切りで、その他は回転ナデである。色調は淡灰褐色～暗灰色を呈し、胎土は細かく、細砂を少量含む。焼成は不良である。070は復元口径9.6cm、器高1.2cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施し、坏部は回転ナデ、内底部は指ナデを施す。色調は灰黄褐色を呈し、胎土中に細砂を少量含む。071は復元底径7cmを測る。外底部はヘラ切りで、その他は摩滅のため不明である。色調は淡い褐白色を呈し、胎土は細かく砂を少量含む。072は底径7cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施す。坏部は回転ナデ、内底部には指ナデを施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土中に白色砂や赤褐色と黒褐色の粒を含む。073は復元底径8cmを測る。外底部はヘラ切り後に板状圧痕を施す。その他は回転ナデで、内底部には指ナデを施す。色調は薄い褐白色を呈し、胎土は精良である。074・075は外底部が糸切りの土師坏である。074は復元口径12cm、器高2.8cmを測る。外底部は糸切り後に板状圧痕を施す。その他は回転ナデである。色調は褐～黄褐色を呈し外面はやや白っぽい。胎土中に白色砂を多く含む。075は復元口径12.6cm、器高2.5cmを測る。外底部はヘラ切り後板状圧痕を施し、坏部は回転ナデ、内底部は指ナデ

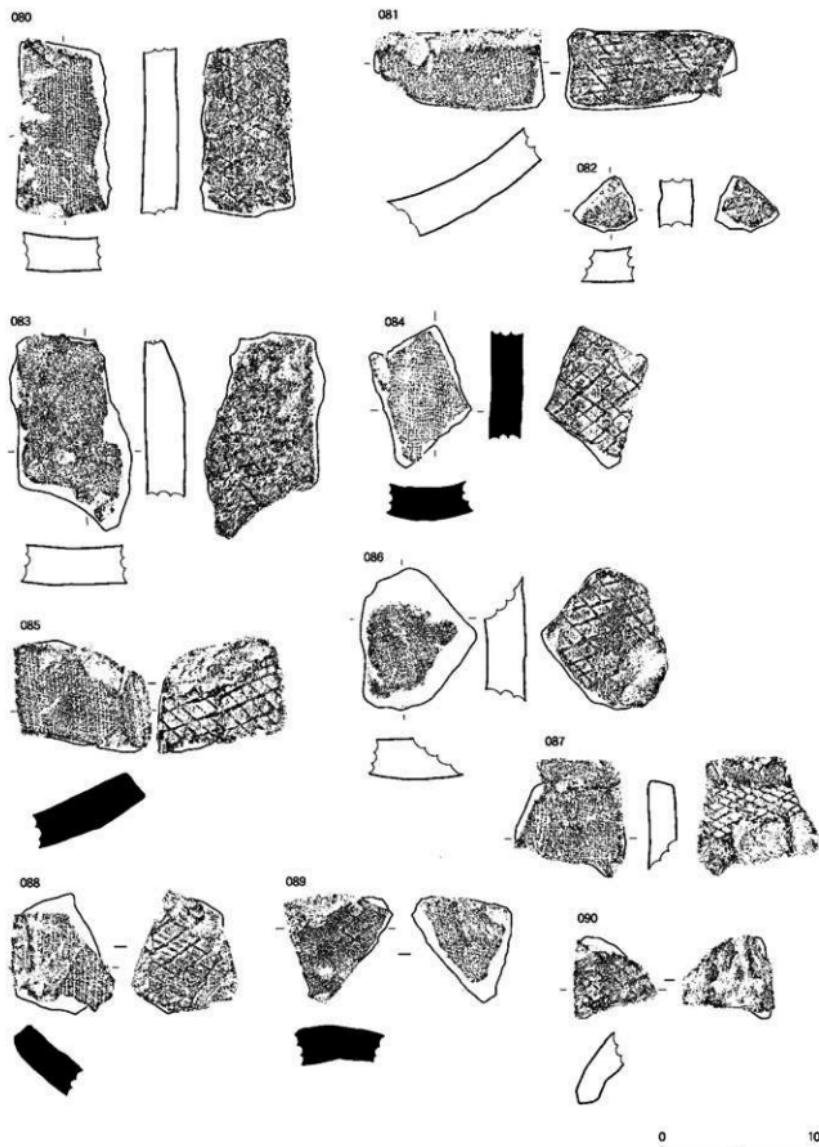


Fig.13 I区出土遺物5 (1/3)

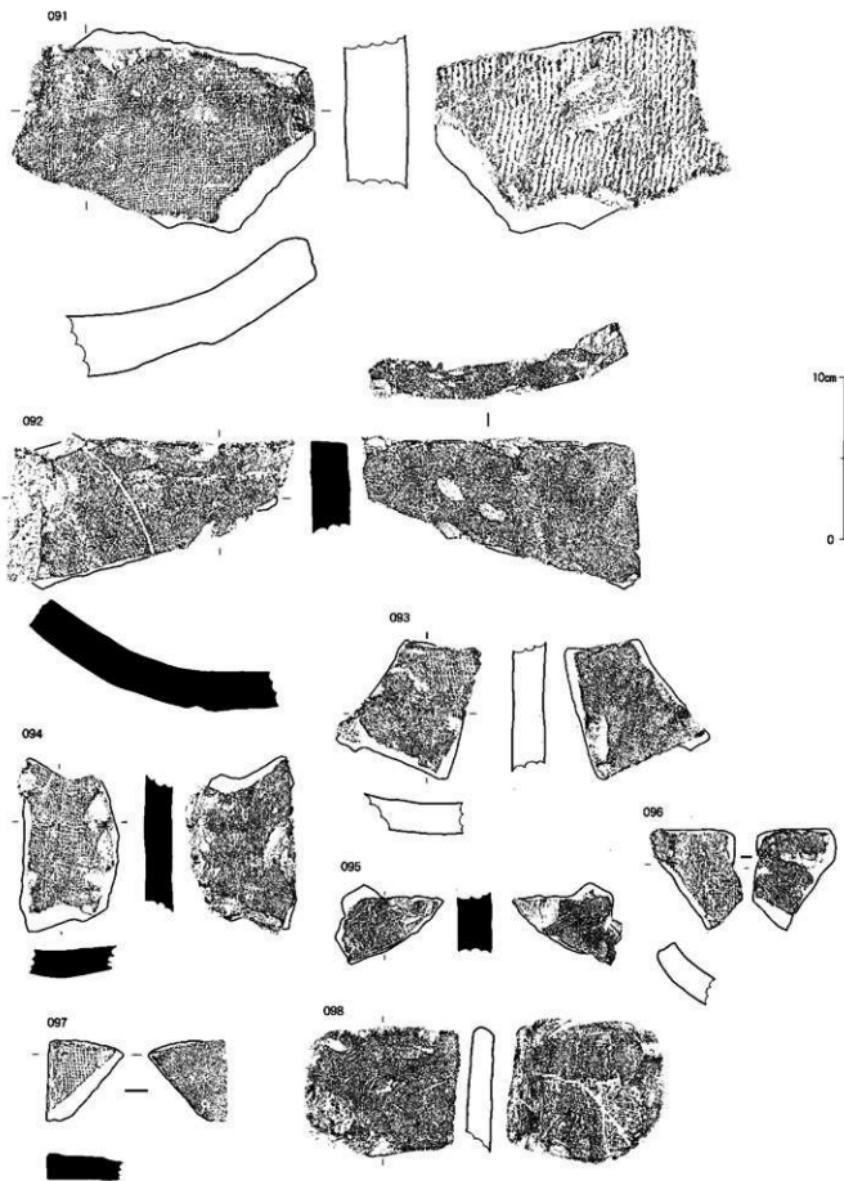


Fig.14 I区出土遗物6 (1/3)

を施す。色調は少し灰色をおびた淡褐色を呈し、胎土中に白色砂を少量含む。076と077は土師器碗口縁か。076は摩滅のため調整は不明である。色調は明赤褐色で胎土中に白色砂を多く含む他、赤褐色粒を含む。077は調整は摩滅のため不明である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は細かく砂を少量含む。078・079は土師器碗である。復元高台径8.7cmを測る。調整は高台部も含めて全面回転ナデを施す。色調は外面の一部が暗灰色を呈する他は黄白褐色で、胎土中に径1mm程の白色砂を多く含む。079は高台部が欠損し、痕跡のみである。調整は摩滅のため不明瞭で外面底部はナデ、外面坏部は横方向のミガキと思われる。色調は黄白褐色を呈し、胎土中に細砂を多く含む。080～098は瓦で、080～090の凸面は斜格子のタタキを施す。080は土師質平瓦で厚さ1.9cm～2.2cmを測る。凸面は細い線の斜格子文のタタキで、凹面には布目圧痕が残る。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。081は土師質平瓦で厚さ2～2.5cmを測る。凸面は細かな斜格子のタタキで凹面には布目圧痕が残る。色調は凸面が灰白色、凹面が青灰色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。082は土師質平瓦で厚さ2cmを測る。凸面は細かな斜格子のタタキで、凹面には布目圧痕が残る。色調は凸面が黒～灰白色、凹面がにぶい黄橙色～灰白色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。083は土師質平瓦で厚さ2.4cmを測る。遺存状態は悪いが凸面は細い線による斜格子タタキで、凹面には布目痕跡がわずかに残る。凸面は灰白色、凹面は明灰褐色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む他、赤褐色粒も含む。焼成は良好である。084は須恵質平瓦で厚さ1.8cmを測る。凸面は細かな斜格子のタタキで、凹面には細かな布目圧痕が残る。色調は青灰色を呈し白色砂を多く含む。焼成は良好である。085は須恵質平瓦で厚さ2.3cmを測る。凸面は斜格子のタタキで灰白色、凹面は布目圧痕で灰白色を呈す。端部は凹面側から2/3まで切れ目を入れてから割っている。胎土中に白色砂を多く含む。焼成は不良である。086は土師質平瓦で厚さ2.4cmを測る。凸面は細かな斜格子のタタキで灰白色、凹面はかすかに布目圧痕が残っており灰白色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む。087は土師質平瓦で厚さ1.7cmを測る。凸面は細かな斜格子タタキ、凹面は布目圧痕が残り、端部はナデを施す。全体が灰白色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む他、茶褐色粒も含む。088は須恵質平瓦で厚さ1.9cmを測る。凸面は斜格子のタタキで明青灰色を呈し、凹面は布目圧痕で灰白色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む。焼成は不良である。089は須恵質丸瓦と思われ厚さ2cmを測る。凸面はナデの後斜格子のタタキを施し明青灰色を呈す。凹面は布目圧痕で灰白色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む。090は土師質で丸瓦と思われる。厚さ1.8cmを測る。凸面は細かな斜格子のタタキで凹面はかすかに布目圧痕が残る。全体に灰白色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。091は土師質平瓦で厚さ3.8cmを測る。凸面は網目タタキで灰色を呈す。凹面は布目圧痕で端部はナデを施す。灰白色を呈す。端部はヘラナデである。胎土中に白色砂を多く含む。092は須恵質平瓦である。凸面はナデで格円形の窪みが2つ並ぶ。凹面は布目圧痕がかすかに残り、小口はヘラによるナデで、切削面は凹面から厚さ1/3程切れ目を入れて割り、破断面は割ったままの未調整である。全体が灰白色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。093は土師質平瓦で厚さ2cmを測る。凸面はナデで、凹面はわずかに布目圧痕が残る。色調は全体的に灰白色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。094は須恵質の平瓦で厚さ1.6cmを測る。凸面は全面ナデで灰色を呈す。凹面は布目圧痕が残り灰白色を呈す。095は須恵質平瓦で厚さ2cmを測る。凸面はナデでにぶい黄橙色から灰白色を呈し、凹面は布目圧痕がかすかに残り灰褐色を呈す。胎土中に白色微粒子をわずかに含む。096は土師質平瓦で厚さ1.6cmを測る。凸面はナデで、凹面は布目圧痕が残る。全体が灰白色を呈す。胎土中に白色砂を多量に含む。097は須恵質平瓦で厚さ1.5cmを測る。凸面はヘラナデで凹面は布目圧痕が残り、周辺端部はナデを施す。全体が灰色を呈し、胎土中に白と黒の微粒子を少量含む。098は土師質の平瓦で凸面は全面ナデ、凹面は布目圧痕で周辺端部はナデで布目圧痕を消している。色調は

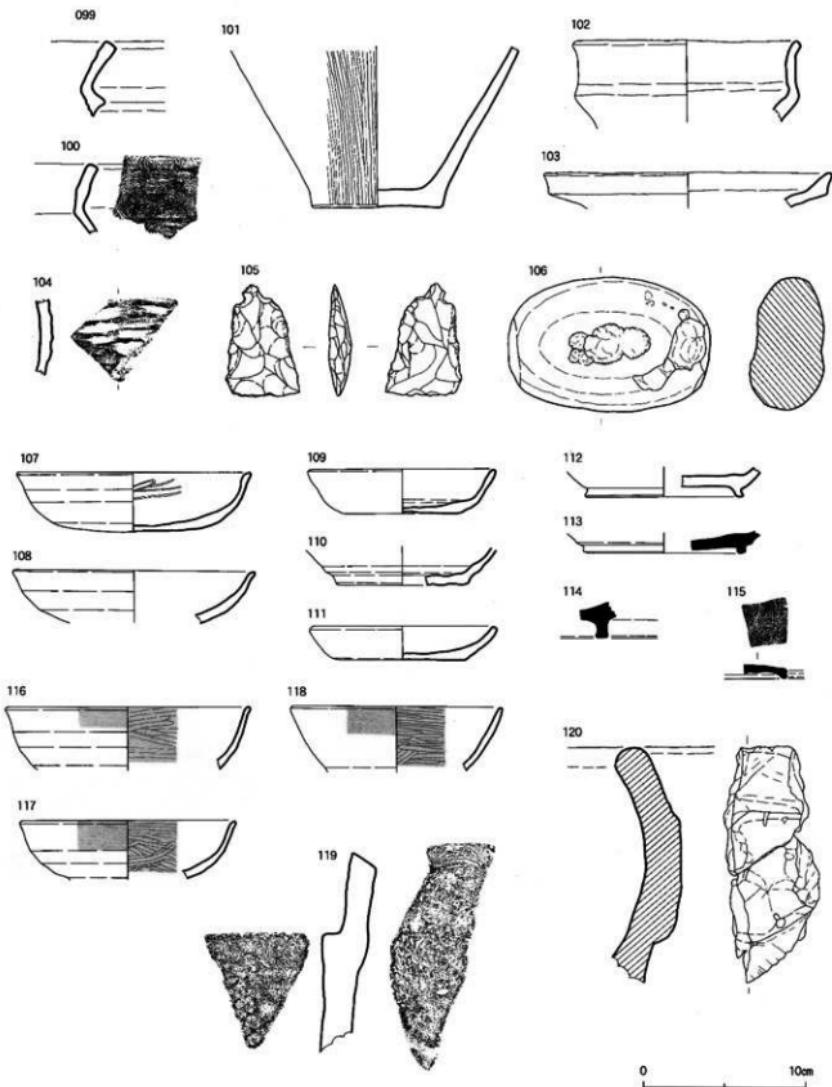


Fig.15 I区出土遺物7 (1/3)

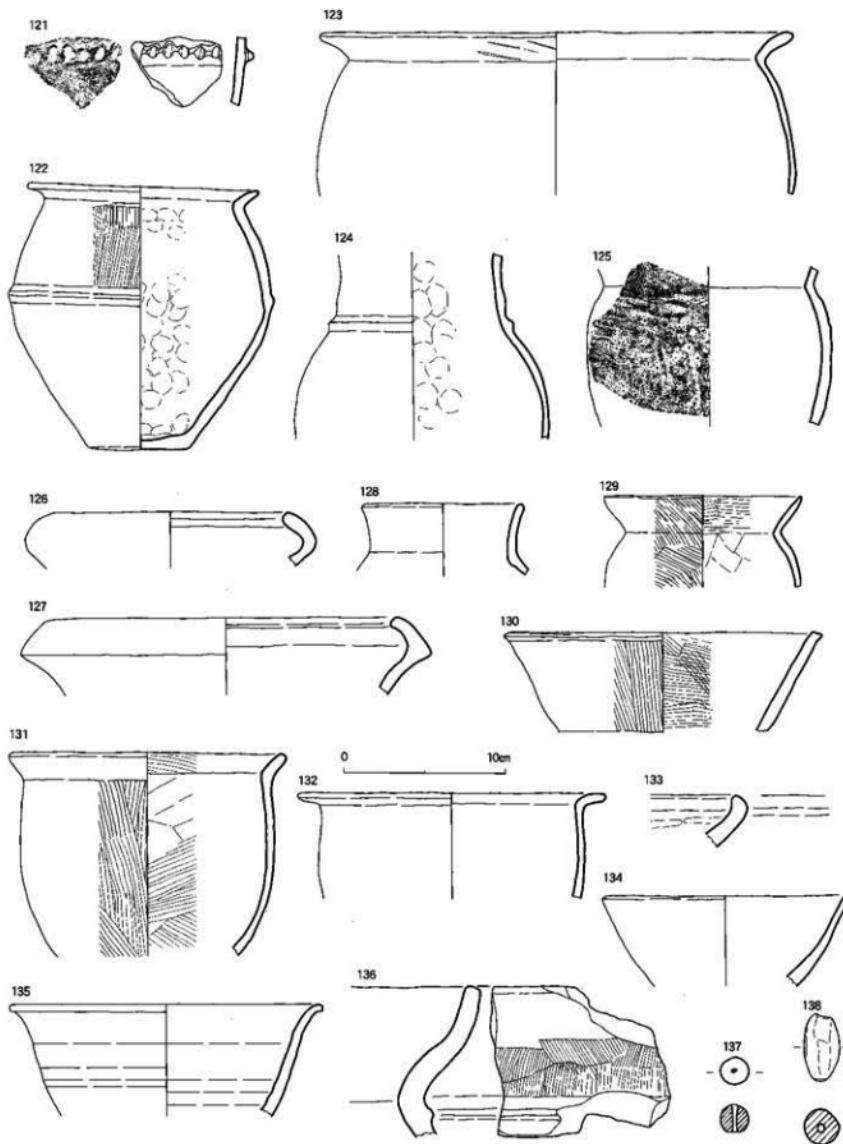


Fig.16 I区出土遗物8 (1/3)

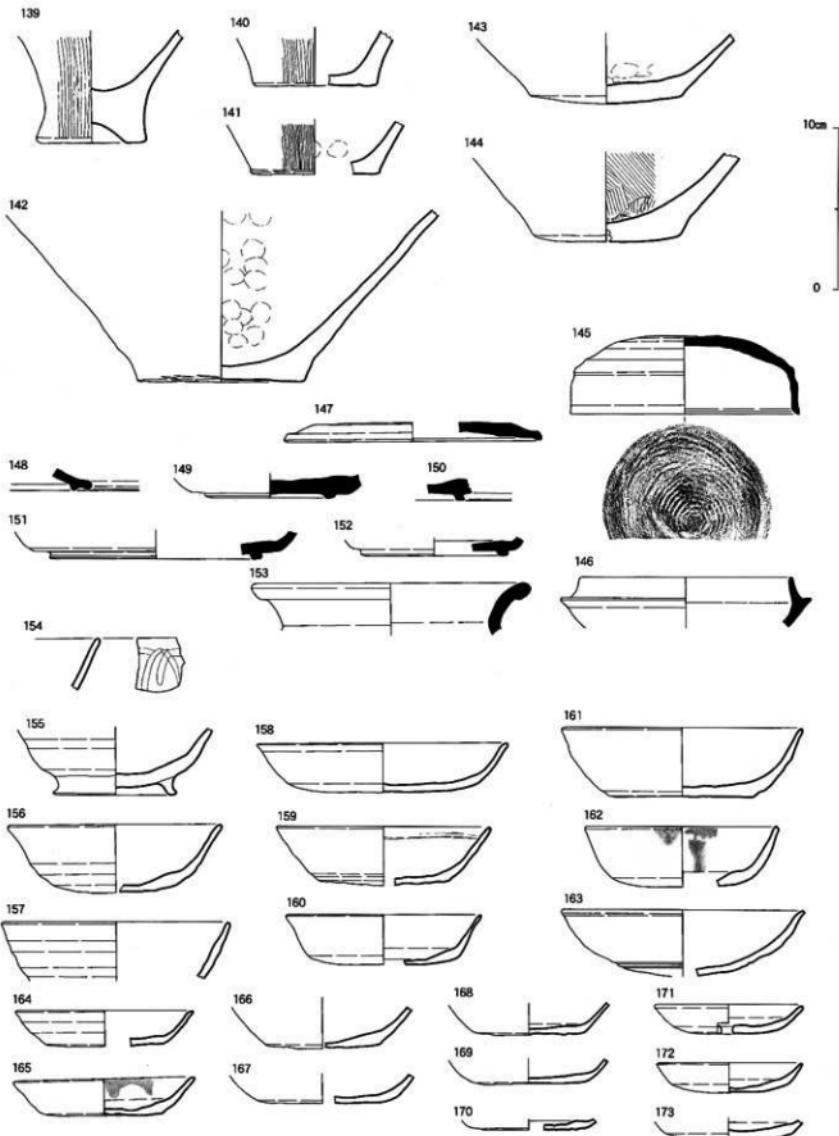


Fig.17 I 区出土遗物9 (1/3)

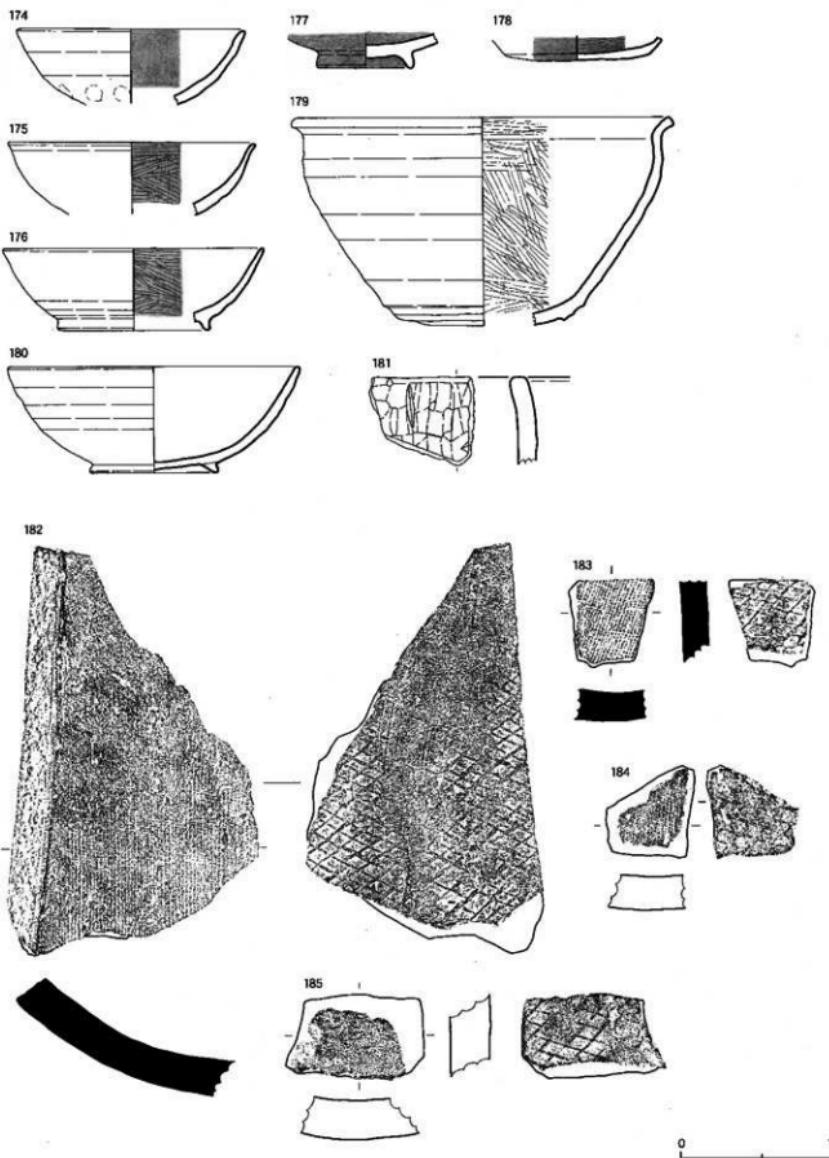


Fig.18 I 区出土遺物10 (1/3)

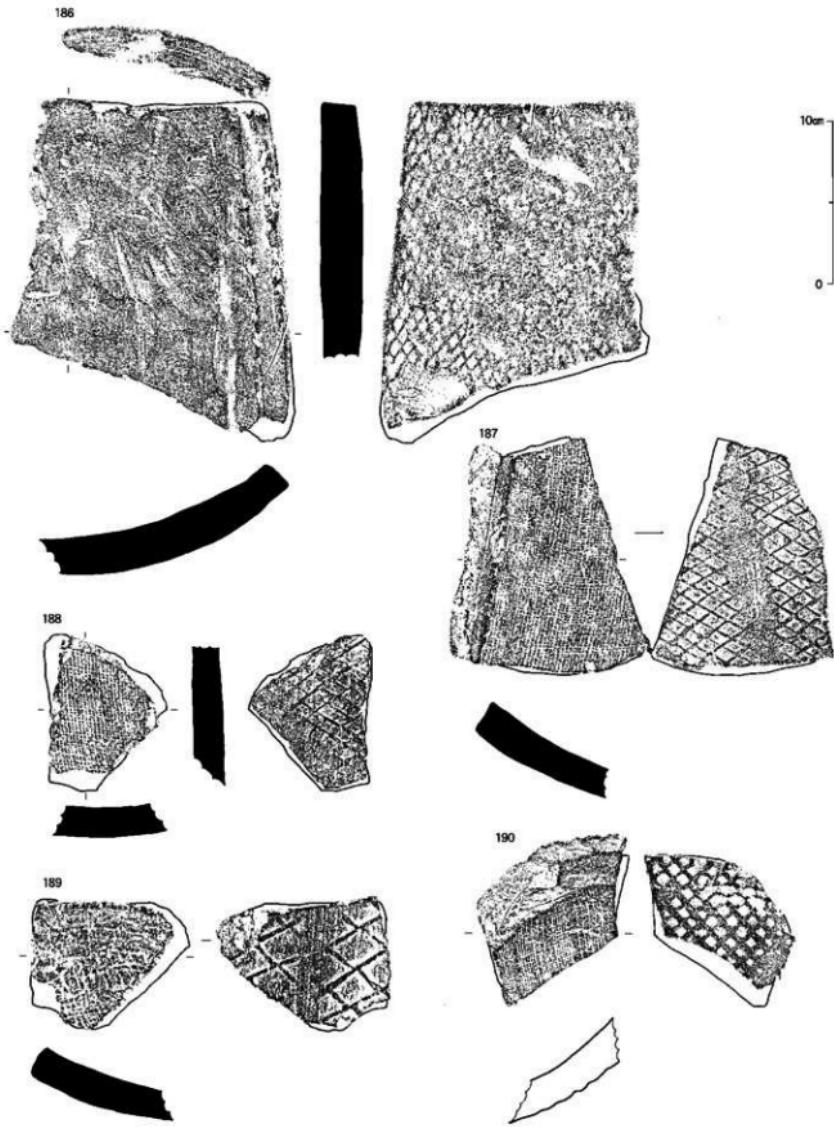


Fig.19 I 区出土遗物11 (1/3)

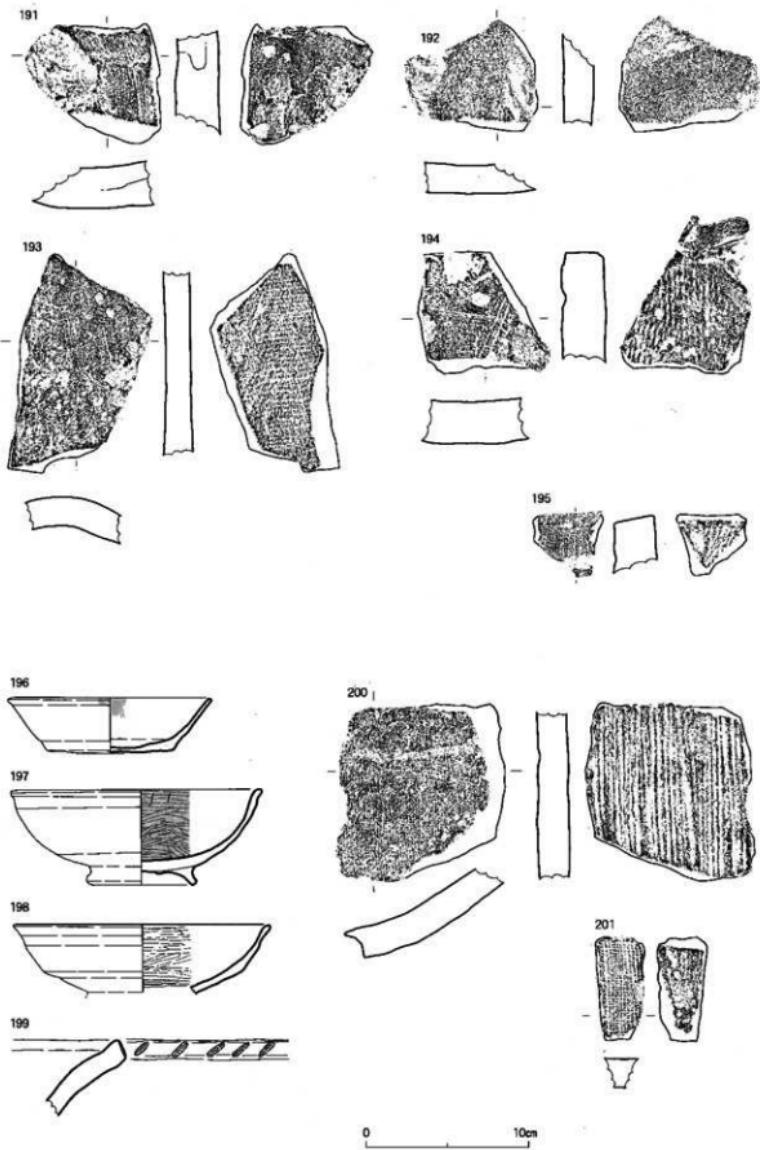


Fig.20 I区出土遺物12 (1/3)

全体が灰白色を呈し、胎土中に白色砂を若干含む。

099～120は中層から出土した遺物である。099は甕口縁で逆八の字型に開き、頸部下に断面三角形の突帯が付く。摩滅のため調整は不明である。淡褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む他に黒色粒を少量含む。100は甕口縁である。摩滅のため調整は不明であるが、かすかに並行タタキ状の痕跡が残る。色調は淡灰褐色で胎土中に径1mm程の白色砂を多量に含む。101は甕底部である。底径8cmを測る。摩滅のため内面の調整は不明で、外面は縦方向のハケメが一部に残る。黄褐色～灰褐色を呈し胎土中に1～2mmの白色砂を多量に含む。102は甕口縁である。復元口径14cmを測る。調整は摩滅のため不明である。色調は淡灰褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。103は甕口縁で復元口径17.6cmを測る。淡褐色を呈し、胎土は細かく白色と赤褐色の砂を含む。104は甕胴部である。外面全体にタタキを施す。灰褐色を呈し、胎土中に1mm程の白色砂を多量に含む。105は安山岩製石匙である。長さ6.9cm、幅4.6cm、重さ38.3gを測る。106は石皿である。長さ12.4cm、幅8.3cm、厚さ4.4cm、重さ76.9gを測る。両側の平坦面が窪んでおり石皿として使用している他、両端が磨り減っており敲石として使用している。107～111は土師杯である。107は口径14.3cm、器高3.7cmを測る。外面は底部がヘラ切り、坏部が横ナデで、内面は摩滅著しいが一部に横方向のミガキが残る。色調は外底部が淡褐色で他は黄褐色を呈し、胎土中に細砂を少量含む。108は復元口径14.8cmを測る。外面は摩滅のため調整不明、内面は横方向のミガキを施す。色調は淡灰褐色を呈し、胎土中に1～2mmの白色砂を多く含む。109は復元口径11.6cm、器高2.7cmを測る。外底部はヘラ切り後板状圧痕を施す。その他は全面回転ナデである。色調は淡褐色を呈し、胎土中に白色砂を多く含む。110は復元底径8.2cmを測る。外底部はヘラ切り、坏部は回転ナデで直線的に立ち上がる。色調は少し赤みをおびた淡褐色を呈し、胎土中に砂を少量含む。111は口径11.5cm、器高2.1cmを測る。底部はヘラ切り後板状圧痕を施す。坏部は回転ナデで内部は指ナデを施す。色調は灰黄褐色を呈し、胎土中に砂を少量含む。112は土師質の高台付坏で復元高台径9.8cmを測る。調整は摩滅のため不明である。淡黄褐色を呈し、胎土中に細砂を少量含む。113は須恵器高台付坏で復元底径は10cmを測る。調整は全体に回転ナデを施し、色調は淡灰色で胎土中に白色砂を多く含む。114は須恵器高台付の盤もしくは蓋か。外面は回転ナデ、内面は指ナデを施す。色調は淡灰色で胎土中に白色砂を含む。115は須恵器坏蓋である。全体に回転ナデで色調は灰黒色である。外面にヘラ記号を刻む。116～118は黒色土器A類頬でいずれも小片である。116は復元口径15cmを測る。摩滅が著しく外面の調整は不明で、内面は横方向のミガキを施す。内面と外面口縁下は黒色を呈し、外面坏部は灰白褐色から褐色を呈す。胎土中に白色砂を多く含む。117は復元口径13.2cmを測る。外面は摩滅が著しいが内面も含めて全体的に横方向のミガキと思われる。内面と外面口縁下は黒色で、外面坏部は淡灰色から淡黄褐色を呈す。胎土中に細砂を少量含む。118は復元口径13cmを測る。外面は摩滅が著しいが内外面とも横方向のミガキである。内面と外面口縁下は黒色、外面下半は淡灰褐色を呈す。胎土中に砂を多く含む。119は土師質丸瓦の破片である。摩耗著しいが、凸面に斜格子タタキがわずかに残る。120は滑石製石鍋片である。上側端部は丸く加工され、図面左側端が本来の鍋上面である。全体に荒れて凹凸が多い。

121～195は下層出土の遺物である。121～144は弥生時代から古墳時代前期の遺物で、121は甕胴部小片で突帯を巡らす。摩滅のため外面は調整不明、内面はナデを施す。淡黄褐色を呈し胎土中に砂粒を多く含む。122は甕で口径14.4cm、器高16.4cmを測る。胴部中央に突帯が1条貼り付く。突帯から上は縦ハケ、下半は摩滅のため不明である。内面は指オサエ後ナデ、口縁部は横ナデを施す。淡黄褐色を呈し胎土中に1mm程の白色砂を多く含む。123は甕で復元口径29.2cmを測る。摩滅著しく調整はほとんど不明で、外面口縁下に板を当てた痕跡がわずかに残る。黄褐色を呈し、内外面とも胴

部下間に煤が付着する。胎土中に3mm以下の白色砂を多量に含む。124は長頸壺である。肩部に突帯が巡る。外面は摩滅のため調整不明、内面は指オサエを施す。淡黄褐色を呈し胎土中に白色砂を多量に含む他、褐色や赤褐色の粒を少量含む。125は瓶胴部で摩滅著しい。内面は縦方向のヘラケズリで、外面はタタキ痕が残る。淡黄褐色で3mm以下の白色砂を多量に含む。126・127は袋状口縁壺の口縁である。126は復元口径14.2cmを測り、全体に横ナデを施す。淡灰褐色を呈し、1~2mmの白色砂を多く含む。127は復元口径21cmを測る。淡黄褐色を呈し、胎土中に3mm以下の白色砂を多量に含む。128は壺口縁で復元口径10cmを測る。摩滅のため調整は不明である。黒褐色から灰褐色を呈し、胎土中に1~2mmの白色砂を多く含む。129は甕で復元口径12.2cmを測る。外面はハケで口縁部はその上から横ナデを施す。内面は口縁が横ハケ後ナデ、胴部はヘラケズリを施す。淡灰黄褐色を呈し、外面は煤が付着する。胎土に白色細砂を多く含む。130は甕か壺の口縁で復元口径19.6cmを測る。調整は外面が縦ハケ、内面が横ハケ、口縁端にはナデを施す。外面は淡灰褐色、内面は黒色を呈し、胎土に白・黄・黒褐色粒を含む。131は甕で復元口径17.2cmを測る。外面の調整は口縁部が横ナデ、胴部が縦ハケで内面は口縁部が横ハケ、胴部上半はケズリ、下半は斜めハケである。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に3mm以下の白色砂を多く含む。132は甕口縁で復元口径19cmを測る。調整は摩滅のため不明で色調は淡灰褐色を呈す。133は鉢の口縁か。内外面ともヘラ状工具によるナデを施す。淡い褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む他、赤褐色粒を含む。134は鉢で復元口径15.2cmを測る。摩滅のため調整は不明である。胎土に1~2mmの白色砂を多く含む。135は鉢で復元口径19.3cmを測る。内外面ともに横ナデで外面には煤が付着する。内面は淡黄褐色で、胎土は精良で砂を少量含む。136は甕沿の口縁である。口縁下に突帯が付く。調整は口縁両面が横ナデで、突帯上側に縦ハケを施す。色調は赤みをおびた淡黄褐色で、内面はやや灰色をおびる。胎土に白色砂と赤褐色粒を多く含む。137は土玉で径1.7cm、重さ4.8gを測る。薄い褐色を呈し、胎土に細砂を多く含む。焼成は良好である。138は土錘である。長さ4.1cm、径2.2cmを測る。摩滅が著しい。黒褐色を呈し、白色砂を多く含む。焼成はやや軟質である。139は甕底部で底径6.7cmを測る。全体に摩滅しているが調整は外面が縦ハケ、底部がナデ、内面は不明で炭化物が付着した痕跡が残る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土に白色砂を多量に含む。140は復元底径7.8cmを測る。内面の調整は摩滅のため不明。外面は縦ハケ、底部はナデを施す。暗褐色を呈し、胎土に3mm以下の白色砂を多く含む。141は復元底径8cmを測る。調整は内面が指オサエ後ナデ、外面が細かな縦ハケ、底部にはナデを施す。外面は淡褐色、内面は黒褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。142~144は甕の底部か。142は底径10.3cmを測る。外面は胴部から底部全面にナデ、内面は指オサエ後ナデを施す。外面胴部下端に木片で押された痕跡が残る。色調は黄褐色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。143は底径9.2cmを測る。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内底部に指オサエ痕が残る。色調は淡黄褐色で、胎土に砂を多く含む。144は復元底径9cmを測る。外面の調整は摩滅のため不明、内面はハケメを施す。色調は外底部が灰褐色で、残りは淡褐色を呈す。胎土に1~2mmの白色砂を多く含む。145は須恵器坏蓋である。復元口径14.2cm、器高4.8cmを測る。外面天井部はヘラケズリ、その他は回転ナデである。内面天井部に同心円状の當て具痕が残る。全面的に淡灰色を呈し、胎土に細砂を少量と黒色粒を含む。焼成は良好である。146は須恵器坏である。復元口径13cmを測る。全体に回転ナデが残り、坏部外面はその上からカキ目を施す。色調は灰色を呈し、胎土に砂を少量含む。焼成は堅敏である。147・148は須恵器坏蓋である。147は復元口径15.8cm、器高2.1cmを測る。外面天井部は回転ヘラケズリでその他は回転ナデである。内面天井部には指ナデを施す。灰色を呈し、胎土に白色細砂と黒色粒を少量含む。148は赤褐色を呈し、白色砂を少量含む。149~152は須恵器高台付坏である。149は復元高台径8cmを測る。外面は高台から坏部